

コミックスに描かれたマクベス夫人の死

佐 藤 由 美

The Portrayal of Lady Macbeth's Death Through Illustrations in Comics

SATO Yumi

2020 年 11 月 5 日受理

抄 録

シェイクスピア作品をコミックス化するにあたり、テキストの削除や平易な表現への変更はしばしば行われるが、原作で仄めかされるのみの場面を視覚化する場合もある。『マクベス』についてはマクベス夫人の自殺がこれにあたり、これまで判明したところ三点のコミックスで描かれている。本稿では、マクベス夫人の作中での立場や夫との関係の中で、夫人が自殺に至るまでの過程がそれらの作品でどのように描かれているかを考察した。クラシカル・コミックス版では二人の関係の変化を鏡という小道具で巧みに表現し、マンガ・シェイクスピアではマクベス夫人が妻として生きるしかなかったこと、夫を唆したことからくる良心の呵責を逃れられなかったことを明示し、マルコシア版では夫人の母性的な態度が夫に拒まれる過程を描いている。それぞれの方法で、夫人が自殺に至るまでの過程が文脈に位置付けされている。

キーワード：ウィリアム・シェイクスピア、翻案、演出、グラフィックコミックス、マンガ

1 はじめに

現在、シェイクスピア作品は多数の国や地域で上演されるのみならず映画、マンガ、アニメなど多様な形で鑑賞され、多くの翻案作品をも生んでいる。20 世紀後半以降はコミックスという形式で取り上げられるケースも増加している¹。イギリスやアメリカ等の英語圏で発行されてきたシェイクスピア作品のコミックスは 1980 年代以降出版されるようになっていく²。2000 年代以降は日本のマンガの手法を取り入れた作品も散見される³。取り上げられている作品は著名なものが圧倒的に多く、今回取り上げる『マクベス』もその一つである。

文学作品をコミックス化する際、しばしば行われてきたことの一つとして、割愛や平易化がある。難易度が高いと思われる語彙、フレーズないし話題を削除し、場合に

より簡潔な語句に置き換えることもある。対象とする読者の年齢層により、その程度は多岐にわたる。古典作品においてはさらにこの傾向が強くなる⁴。

また、原作にない場面を設けることも時として行われる。登場人物によって詳細に語られるか仄めかされたりすることで読者の想像力をかき立てはするが、実際には登場しない場面が文学作品には見受けられる。舞台化や映画化をも含む、作品を視覚化する試みにおいては、そのような場面を読者ないし観客に明示するという手法もありうる。これもある意味では平易化の一部であろう。古典作品を読者に理解しやすく紹介しながら、翻案者の多様な解釈をも示すという点で注目されるべき手法である。

今回取り上げる『マクベス』は、これまでコミックス化された点数が多いことのみならず、原作で仄めかされるのみの場面が何点かの作品で描かれ、しかもその場面が現れるタイミングが作中でほぼ同一であるという点でも注目に値する。それは、マクベス夫人が自殺を遂げる場面である。作品により自殺の描かれ方は異なり、それによって読者に与える印象も作品における登場人物間の関係も異なってくる。本稿ではその場面は夫人がそれまでに登場した場面とどう関連し、主人公であるマクベスとの関係性や作品解釈にどう影響するかを考える。

生前の夫人は様々な場面で比較的長時間にわたって登場する。夫からの手紙で魔女の予言を知らされ、帰還した夫にダンカン王の殺害を唆す場面に始まり、夢遊病状態に陥るまでの場面は独白も交えて詳細に描かれている。しかし、その死は侍女たちの悲鳴と、従者の“The Queen, my lord, is dead.” (V.v.16)⁵ というただ一言で知らされ、結末で“his fiend-like queen, / Who, as 'tis thought, by self and violent hands / Took off her life” (V.ix.35-37) と夫人が自殺したと暗示されるのみである。存在感の強かった夫人の死は、説明が非常に少ないため唐突に思われる。また、原作の記述を読む限り、夫人の死を知ったマクベスの反応は必ずしもそのことに衝撃を受けているとは思われない。彼の独白は夫人の死という個別の事態を悼んでいるというより人生の虚しさを一般論として述べるもののよう聞こえる。そのため、この場面ではマクベスが夫人の死をどう受け止めたかが把握しにくい。このように、夫人の死およびその前後の場面には現代の読者にとって理解困難かもしれない箇所がある。

このような状況でマクベス夫人が自殺する場面を挿入することで、製作者側はマクベス夫妻の関係が劇中でどう変化したかをよりわかりやすく示し、作品解釈を示す機会を増やす可能性がある。とはいえ、マクベス夫人が自殺を遂げる場面を扱ったコミックスはそれほど多くない。筆者がこれまで入手できた多様なコミックスの中で現時点で三点である。それらを理解するには、それぞれの作品において夫人はどう描写されているか、マクベスとの関係性はどう描かれているか、自殺の場面で明らかにされるのは何か、いわば演出の方法を見る必要がある。

ジャンルは異なるが、コミックス化は演出に関しては上演とも共通する要素がある。例えばマクベス夫妻の関係については、松岡和子がマイケル・ボグダノフ演出によるESCの上演（1986年）について、以下の考察をしている。

「強い」マクベス夫人は、一幕七場で王殺しの決心を鈍らす夫を叱咤する。誓いの遂行のためなら、乳を吸う赤ん坊を胸から模擬話、脳みそをたたき出して見せると言う。そう言った直後、ジュニー・クウェイル扮するマクベス夫人はマクベスの頭をその胸にひしと抱き寄せたのだ。「赤ん坊」という言葉の残像が重なるこの一瞬の「絵」によって、マクベス夫妻の関係の底に母子的なものがあることが感じられた。(中略) 夫に対する彼女の大きな支配力、圧倒的な影響力が納得できるではないか。

この解釈は、三幕市場でマクベスが二人の刺客にバンクォー殺しを指示する場面の思いがけない演出で生きてくる。

(中略) [マクベスは] 刺客に言葉をかけようとするのだが、その前に、それが当然という顔でその場に立ち会おうとする妻を、マクベスは目顔で追い払ったのだ。はっとした。マクベス夫人は観客以上にはっとしたに違いない。(中略)

この場に至るまで、マクベスとマクベス夫人は何もかも一緒にやってきた。王位に就きたいという野心も、王の暗殺計画も、すべて二人は共有してきた。だから夫人にしてみれば、バンクォー暗殺にもおなじように一枚噛んで当り前なのだ。ところが、彼女は共犯からはずされる。これ以後、「母親離れ」した「息子」は一人でことを運ぶ。彼女のショックはいかばかり。

(中略) 明らかにボグダノフは、夫人の精神がここからバランスを崩し出すと解釈している。現に次の宴会の場(三幕二場)では、登場早々から夫人にはその兆候が見えた。彼女は、夫マクベスと一心同体でなければ何者でもなくなってしまうのだ。この舞台を見ているとのちの彼女の精神錯乱と夢遊病も、遅ればせの罪の医師だけが原因ではないと思えてくるのだ⁶。

以上が、原作に書かれていないことを加えることにより、マクベス夫妻の関係を浮き彫りにするという手法とその効果が説明されている部分である。この手法は、多様な解釈をされがちな古典演劇を、演出家ないし翻案化の解釈を交えたうえで現在の観客ないし読者に説明するうえで有効ではないかと思われる。以下では、この考察を参考の一部として、マクベス夫人の自殺という場面の挿入およびマクベス夫妻の関係性に集中して、『マクベス』がどう解釈されているか考察したい。なお、それぞれの作中の台詞は、変更されているものも多いため作品から直接引用する。

2 クラシカル・コミックス版

まず、クラシカル・コミックス(Classical Comics、以後CC)社のoriginal text版を見る。この出版社から発行された一連の古典作品は、アメリカンコミックスなどで作画している人材を活用したことで話題を呼んだ⁷。『マクベス』も絵柄はアメリカンコミックス風であるが、作品世界は11世紀のスコットランドらしく見えるよう描かれている。マクベス夫妻は中年に近く見える。マクベスは目の周りの隅が目立ち、

夫人は頬がこけて概して目つきが陰しく、外見的にはいずれも悪役の印象を与える。ここでの夫人の主要な登場場面を見る。

初登場の手紙を読む場面では一コマごとにクローズアップが進む。三コマ目ですでに陰謀を企んでいることをうかがわせる表情となり、彼女の性格を読者に端的に紹介することとなる。“Come to my woman’s breasts and take my milk for gall.” (p. 16) では背景に燃え盛る炎と悪魔と思われる顔が複数浮かんでおり、彼女が悪魔的な所業に手を染めつつあることが暗示される。ここで夫人は自分の胸部を押さえるが、この動作は自分の女性としての魅力と引き換えにしてでも陰謀を進めたいという意味を強調する。ダンカンを歓待した後、夫の決意が揺らいでいると感じた夫人は、苛立ちを露わにする。再び胸部を押さえながら“I have given suck, and know how tender ‘tis to love the babe that milks me.” (p.21) と話すところでは、女性であることのみならず母性をも否定する意思を明らかにする。重要なものを犠牲にしてでも企みを実現する意思を明らかにして上で、王の殺害の手順について説明する。マクベスはこれに対し、夫人に向き直り、彼女を撫でながら“Bring forth men children only!” (p. 22) を称賛の言葉として発し、最後には手をつないで退場する。思い切ったことを実行することこそ男らしいと夫人は主張するが、そこで胸部を押さえることで、結果的には女性としての性的魅力をも夫の説得のため逆説的に利用した印象が残る。

マクベスがダンカンを殺害する場面では、夫人の攻撃的な気性が強調される。マクベスが殺害を終えるまで夫人は酒を飲みながら待つ。手には酒の入った容器と杯を持っている。マクベスは怯えた表情で戻るが、夫人は夫と会話しながらも酒を飲み続け、さらには近くにいる犬たちに容器を投げつけることで、夫の怯えに対する苛立ちを示す。マクベスは弱音を吐き、夫人にすがりつきながらくずおれるが、それに対し夫人は剣を元の場所に戻し王の従者に罪を着せるようにと指示しながら夫を平手打ちにする。その表情からは、夫への苛立ちが頂点に達していることが見て取れる。夫人は剣を戻し、手を血に染めて部屋に戻り、そのまま夫の手を取って寝室へと退場する。この時点までは夫人がマクベスをコントロールしているように思われる。

二人の関係はその後も変わらないように見える。マクベスがバンクォー殺害を暗殺者たちに命じた直後、マクベスが一人でいようとする姿を見て不審に思う夫人に、彼は抱きついてバンクォーやその息子が生きていることへの不安を率直に表す。夫人は夫を叱咤激励し、二人は手をつないで宴に向かう。恐怖や怯えという「男らしくない」とされている感情を隠さないマクベスと、それらの感情に振り回されないようにと説得する夫人という構図は、その後、バンクォーの亡霊に驚き怯えたマクベスが最後には亡霊に食器を投げつけようとし、宴を台無しにする場面まで続く。客が退場した後、マクベスは王冠を見つめて王位への執着を露わにし、魔女に再び会って助言を求めることに気を取られながらも、夫人の手を取り寝室へ向かう。手をつなぐ場面が何度か繰り返されることで、マクベスが妻との関係を保とうとし続けていることがうかがえる。

しかし、二人の関係が本当に見えているとおりなのか疑問を呈すのは、廊下に取り付けられた鏡である。宴のための身支度が整ったところで、マクベス夫人は鏡で自らの姿を見る。夫人がマクベスを力づけようとするところで、鏡が今度は二人の姿を映す。これらの場面では、彼らの関係が鏡に映っている姿と同様に見せかけだけではないかと思わせる。鏡は夢遊病の場面でも効果的に用いられる。ここでは夫人の顔はやつれ、きちんと結われていた髪は完全に解けている。独白は終始鏡の前で行われ、夫人の顔が三度にわたって鏡に映る。独白の中には夫に向かって話しかけているものもあるが、それらのほとんどが、夫人の顔が鏡に映る場面で行われている。夫人は夫ではなく鏡に向かって話しかけているように見え、マクベス夫人の夫との関係が表面的なものであったことがさらに明確に示される。ダンカンを殺害するまではマクベスと協力して陰謀を進めてきたにもかかわらず、マクベスの即位後は夫人が一人取り残されていることを、夢遊病の場面で鏡は明らかにする。

夫人が自殺するのは、マクベスが戦闘準備に入るところである。夫人はマクベスの背後にある塔の上に立ち、このコマは夫人を中心に描かれる。他の人物が霧でぼやかされている中、マクベスと夫人はくっきりと描かれ、マクベスが一瞬後ろを振り向きさえすれば夫人を発見できるであろうが、振り向こうとしないことが強調される。夫人の表情はあらぬ方を見ているかのようなのである。次のコマはマクベスに焦点を当て、夫人はコマの隅に小さく描かれるが、両手を広げ今にも飛び降りそうな様子である。が、次のコマでは飛び降りる姿は描かれず、夫人が立っていた場所で侍女たちが彼女を探し回る様子に焦点が当てられる。その次のコマで、侍女たちの悲鳴に驚きを示すマクベスに焦点は戻る。マクベスは夫人の死を知り、次のページでは独白しながら座り込み衝撃を受けた様子を示すが、次のページでは再び戦闘に集中する。一連のページからは、夫人が自殺の覚悟をした上で飛び降りたかどうかは不明である。それよりもこの場面で強調されるのは、二人の関係が鏡により暗示されたような希薄なものになっていたということである。

3 マンガ・シェイクスピア版

次は、日本のマンガの手法を取り入れたことを制作陣が喧伝して注目された、イギリスの出版社 SelfMadeHero 社によるマンガシェイクスピア (Manga Shakespeare、以下 MS) 版を見る⁸。舞台は近未来、数多くの高層ビルが倒れ荒涼とした雰囲気漂わせる、核戦争後の世界である。登場人物が使用する小道具は近未来的だが、彼らの装束や武器は和洋折衷である。2008 年当時、日本のマンガやアニメの紹介が増えていたが、MS の制作陣もマンガを含むグラフィックノベルによる若年層へのアピールを大いに意識していた⁹。

登場人物の設定も読者層を考慮した結果という可能性もある。ここでのマクベスは筋肉が強調され、若く見える。また、顔つきからは邪悪さより素朴さがうかがわれ、どちらかといえば好感を抱かれそうな造形である。マクベス夫人も若く、ミニスカー

トを着用する女性的な魅力のある体型の持ち主として描かれている。しかし、冒頭にある登場人物の紹介ページですでに明らかにされているように、数少ない女性の登場人物の中で夫人のみが男性たちのように髪を結っている。物語が展開し、髪を結った男性登場人物をさらに多く見るにつれ、夫人はこの男性中心的な世界での成功を願っているのではと思わせる。その一方でこの紹介ページは夫人の従属的な立場をも明らかにする。夫人の登場するページでは“Macbeth and Lady Macbeth” (p.5) と題され、すでに紹介されているマクベスが再び現れる。夫人は夫の背後から手を伸ばし、夫は手のひらで夫人の手を包んでいる。この構図には、マクベス夫人には妻としての役割しか与えられていないという、『マクベス』を読む上での大前提が示されている。

初登場の場面で、夫人は戸外におり、崖の近くに立って夫からの連絡を受ける。これは従来室内に設定されることが多かった場面である。広大な荒野を背景にした初登場の場は後姿ながら、戦乱の世で成功したいという夫人の野心を暗示する。“Come, you spirits, unsex me here.” (p. 50) は自らの短剣で手に傷をつけ、剣から血が滴り落ちるところで発される。背景に現れる三頭の竜は、夫人の野心を暗示するのみならず、髪の生えた頭部と指先に長い爪をもつ、人と蛇の要素を併せ持つ三人の魔女を連想させる。夫人は魔女たちと血による契約を交わすことで、野心の成就をさらに確実なものにしようと努めているかのようなのである。マクベスと再会した直後には喜びの涙を流しはするが、殺害を唆す場面では険しい表情を保ち、夫をコントロールしようとする態度を露わにする。ダンカンを歓待した後も、殺害をけしかける場では夫と距離を置き険しい表情で説得しようとする。夫に触れながら話すのは一コマだけで、場面により距離をおきほとんど叫んでいる様子も描かれる。説得が進むうちに、マクベスの表情も夫人のものと同様になり、二人が共謀者となることが明らかにされる。

王の殺害場面では、マクベス夫人の緊張感のみならず、大事を終えて脱力したマクベスの対比が示される。マクベス夫人が夫を迎える際の表情は険しく、無事の帰宅に安心するのではなく、殺害が成功したかどうかを確認しようとしている。殺害の様子を語るうちにマクベスは茫然とした表情を表し始め、剣を元の場所に戻すようにという夫人の説得に応じない。夫人が剣を戻し部屋に戻った後も茫然としたままのマクベスを見て夫人は夫に平手打ちをし、引きずるように寝室へと連れていく。マクベスの表情はそこでようやく緊張を取り戻し、夫人は彼を正気づけるために平手打ちをしたかと思わせる。

マクベスが即位した後、夫人がコントロールする側であった二人の関係は変化を見せ始める。バンクォーの殺害を命じた直後のマクベスの表情は固く、夫人が不審の目で夫を見ても表情は変わらない。しかし、二人は共に退場し、マクベスが夫人に冷淡な態度を取ることはない。その後もマクベスの妻に対する態度は基本的に変わらない。宴の場で、バンクォーの亡霊を見たマクベスは床に座り込むほど恐れおののくが、夫人は部屋の隅に夫を引きずっていき叱咤する。怯え続ける夫に声をかける夫人は夫と密接してほぼ同じ大きさで描かれ、夫人が夫にとって存在感を保っていることが暗示される。客の退場後、諦観したような表情で今後の対応を考える夫に、夫人は声をか

けながら夫の手を取る。ここで二人の手がクローズアップされ、次のコマで二人は手をつないで退場する。この場面では夫人が夫婦としての連帯感を保とうとする姿が強調される。しかしそれは薄暗がりの中、後ろ姿で小さく描かれ、マクベスの表情と相まって二人の関係が不安定になるであろうことが暗示される。

夢遊病の場面では、衣服は同じだが結った髪はほつれ始め、マクベス夫人が身だしなみに気を配らなくなっていることがうかがえる。しかしながら、手を洗うように夫を叱りつける際の表情は殺害直後と同様に陰しく、気性の激しさが全く失われたわけではないことが暗示されている。“Come, give me your hand.” (p. 158) と声をかける場面では夫人の手がクローズアップされる。これは手の染みが落ちないことを嘆くためではなく、ダンカン殺害後に夫の手を取り寝室へ戻ろうと促す場面の再現である。ここでは精神錯乱の中でも夫への愛情を失っていないことが暗示される。

夫人が再び登場するのはマクベスが医師に夫人の様子をたずねる場面である。夫人は城内の欄干によりかかっている。その二コマ後、夫人が涙を流す姿がクローズアップされる。マクベスが戦闘準備を進める中、夫人が欄干を乗り越え飛び降りる様子が、侍女たちの悲鳴とともに表される。これらの追加された画面からは夫人が夢遊病状態から覚めて意識が鮮明になったこと、自殺は自責の念に駆られた結果であることが明らかにされている。

夫人の死に対するマクベスの反応は悲嘆の念を示している。マクベスは死体の元へ駆け寄り、死体をかき抱きながら独白する。独白の場面に一ページ丸ごと費やされ、夫人の死で受けた衝撃の大きさが台詞そのものよりも明確に語られる。それによりマクベスが夫人への愛情を保っていたこと、すなわち夫人が保とうとしていた夫との連帯感に答えがあったことが強調される。

この作品の独創的な点は、この場面の後も死体となった夫人が登場することである。最後から二コマ目の見開きのコマでマクダフはマクベスの首を掲げる。ここで作品が終わるかと思われたところで、次の見開きのコマが用意されている。マクダフはマクベスのみならず夫人の首も掲げ、後者が場面の中心に配置されている。二つの首を掲げるマクダフの姿を武将たちが取り囲み、様々な反応を示す場面でこの作品は終わる。夫人の首が夫のものと共に晒されることで、冒頭で暗示されていた、男性と同等の存在になりたいという夫人の野心は、別の形で死後に叶えられることになったというアイロニーを感じさせる。

4 Markosia 版

マクベス夫人が自殺する場面を描いているもう一つの作品は、主としてグラフィックノベルを扱う Markosia Enterprises というイギリスの出版社によるものである¹⁰。先に紹介した二作と異なり巻末には注釈や作品解説はなく、成人向けで娯楽性が強い。本編はほとんど全てのページが三段に区切られ、一段の区切りは二〜三コマの正方形ないし長方形に抑えられており、その結果、躍動感が乏しくなっている。その中で、コー

ダーの領主の処刑やダンカン王の殺害など、原作では語られるのみの場面が加えられ陰鬱なイメージが増大している。時代設定は11世紀のスコットランドのように見え、マクベス夫妻は中年として描かれている。この点ではCC版と共通点があるが、相違点は台詞の扱いである。大幅に削除された上で現代風に変えられている個所が多く、原作にないものも加えられ、さらにはある人物の台詞を他の人物が口にすることさえある。

マクベス夫人が初登場するのは、魔女の予言を知らせる夫の手紙を読む場面である。次のコマでは夫人は手紙を読み終えた後、不安そうな表情を見せるのみで、従者が登場するまでの台詞は一切削除されている。夫人の決意が固まっていることは、夫と再会した直後の会話で明らかになる。王の殺害をもくろんでいることを決して知られないようにと諭す夫人に対し、マクベスは“We should discuss later.” (p. 18) の一言でかわすのみである。削除により、夫人の発言は唐突に思われるが、彼女の固い決意もうかがえる。また、マクベスの台詞の少なさは、彼が妻を制しきれないことを表している。王を歓待した後のマクベス夫妻の会話でも、マクベスが強い口調で妻を叱りつけるのは“Watch your tongue, woman!” (p. 19) の一言のみである。男性中心の発想が露わな文言ではあるが、男とは何をすべきか、何をすれば男でなくなるかを論じている中で出るこの言葉は説得力を欠き、夫人を黙らせることはできない。ようやく二人の距離が縮まるのは、夫人が王の護衛に酒を盛って眠らせる計画を漏らし、マクベスが王を殺害して従者に罪を着せようという意思を前面に出す場面である。二人の顔が近づいたところで“Bring forth only sons!” (p. 19) とマクベスは笑みをたたえながら言うが、ここではマクベスが夫人の決断力を高く評価するためにこの台詞を発していることがうかがわれる。

王殺しの場面で強調されているのは、マクベスの恐怖の大きさと、彼をなだめようとする夫人の振る舞い方である。門がノックされる音に対して、目を見開いて恐怖を示すマクベスとは対照的に、夫人は冷静になろうとする。ダンカンの遺体を見て、“He just looks like my father.” (p. 24) (原作では殺害前に呟く) とおののき、“Dear God! It might be too late to ask for his protection.” (p. 25) と良心の呵責を感じ始めるが、それでも夫をなだめようと努めている。部屋に戻った夫人は、かがみこみ、未だにおびえているマクベスの首を両手で抱え、自分の方を振り向かせ、彼の聞いたものが幻聴であると言いつける。そこで彼は“Look, now your hands are as red as mine.” (p. 25) と本来は夫人のものであるが所有格を置き換えてある台詞を発し、それに対し夫人は“I would be ashamed if my heart was as pale as yours.” (p. 25) と返す。この会話は、極限状態にある二人がジョークを交わしているような印象を与え、二人の親密さを感じさせる。マクベスはその後、ノックの音を笑い飛ばすようになり、ようやく心の余裕を取り戻す。夫に殺害を唆す際に夫人は母性を否定する台詞を発したが、殺人後の場面ではその台詞とは対照的に、夫人がマクベスの母親的な存在でもあることが暗示される。

バンクォー暗殺を暗殺者に命じた直後の会話からは、二人の関係性が変化し始めて

いることがうかがわれる。夫が一人になりたがっていることを察し、夫人は夫に抱きつき宴の時間が迫っているので微笑んでほしいと伝える。この姿は、母性よりは、夫の考えていることを理解できなくなり始めている不安を感じさせる。夫人の存在感が薄れつつあることは宴の場でも暗示されている。バンクォーの亡霊を見て恐怖を示すマクベスを夫人が叱咤する場面は四コマに抑えられ、うち一コマではマクベスは夫人を押しつけて亡霊に食器を投げつけようとする。また、マクベスが床にくずおれる場面で、客を退出させる夫人は背後に小さく描かれるという構図からもそれはうかがわれる。その後のコマで、夫人は元来マクベスの台詞である “We’re just amateurs in these matters.” (p. 31) を口にする。陰謀や殺人の素人なのだから失態を見せてもしかたがないと言い聞かせているかのようである。そして二人は支えあいながら退場するが、この場面はシルエットで描かれる。宴とその後の場面が示しているのは、マクベスがいまだ夫人に頼っていること、しかし夫人の母性的なふるまいが説得力を失いつつあり、二人を待ち受ける展開が暗いということである。

夢遊病の場面はわずか二ページであるが、ダンカン殺害直後に芽生えた良心の呵責が増大し、夫人の精神状態が脆くなっていることが視覚的に明らかに示される。これまでボールをかぶり、顔と手以外は肌を露出せず体型もはっきりしない服装をしていたマクベス夫人は、ここでは夜着一枚でかぶりものもなく、髪をほどいた状態で現れる。憔悴し、始終手をこすり続け、ノックの音が聞こえるところでは、ダンカン殺害直後のマクベスと類似した怯えた表情をする。この服装と表情により、夫人の心身の衰弱が一層進むであろうことが暗示される。

自殺の場面はさらに視覚的なインパクトが強い。地上で通行人たちが夫人に気づき騒ぐ中、全裸で城の窓から飛び降りるというものである。ここでページの左半分では三段の枠が取り払われ、夫人がどれほど高い場所から飛び降りるかを強調している。このページの右半分では、夫人は無表情であり、正気を完全に失っていることがうかがわれる。夢遊病の場面で夜着一枚だった夫人がさらに服を脱ぎ、城内から戸外へと身を投げ出すことで、ダンカン殺害後に口にしていた良心の呵責が大きくなり、精神のバランスを失わせたことが明らかになる。

夫人が死んだと報告を受けたマクベスの反応は、原作と大きく異なる。一瞬驚きを示すものの、第一声は “She could have waited till tomorrow.” (p. 49) である。次の台詞は “There’s no time to mourn” およびその直後に “I have almost forgotten the taste of fear.” (p. 49) (本来は夫人の死を知る前の台詞) である。原作では “She should have died hereafter” (V.v.17) となっていた台詞を「明日まで待つことだってできたらうに」とより具体的な文言に置き換え、著名な独白を敢えて避け、以前は自分も恐怖を知っていたと諦観した表情で話している。この場面は、マクベスにとって心を病んだ夫人が目前に迫った戦の妨げとなっていたこと、夫人の死を知っても自己中心的な態度を変えないこと、ひいては夫人への愛情や連帯感を失っていることを示す。

5 結論

マクベス夫人の自殺は、原作ではあくまでもわずかな台詞で仄めかされるのみであり、自殺の場面を創作することは原作からの逸脱、ないしは翻案の一種であるともいえる。夫人についてもう一点明らかにされないことは、夢遊病に陥るほど苦しんでいる原因である。独白の内容から考えれば、第一の原因は良心の呵責であると思われる。が、夢遊病に陥る前マクベスと交わした会話の内容を思い出せば、夫人がバンクォーの暗殺後から夫にないがしろにされるようになり、自分の役割を確認できなくなった不安もあるのではという、松岡がある上演について行ったような推測も可能である。マクベスの態度の変化は、原作でも自殺の場面同様かそれ以上に弱くはあるが仄めかされており、この推測も全くのこじつけではない¹¹。この解釈は上演のみならずコミックスにおいてもある程度の説得力を持つように思われる。夫人が複数の要因に苦しんだ果てに自殺したと解釈することは容易である。上演であれ、コミックスであれ、視覚的な要素を用いたパフォーマンスにおきかえる際、演出者ないし翻案者は自らの解釈を示す。自殺という場面を補足することで、マクベス夫妻の関係や夫人の心境の変化を観客ないし読者によりわかりやすい形で伝えることもあるのではないだろうか。

CC版では、マクベス夫人の攻撃的な性格が強調されている。酒をあおりながら夫が殺人を終えるのを待ち、さらには夫を意に従わせるために平手打ちをするといった場面がそれをよく表している。不安をごまかすためと解釈されうるが、それでも夫人の性格が強く出ているといえる。それに対しマクベスはバンクォー殺害の場面までは妻に縋り付く気弱さが強調され続ける。二人の関係の変化は二人の態度そのものよりは鏡という小道具で象徴的に表されている。夢遊病の場で夫人を映す鏡が暗示しているのは、夫との関係が変化し自分が取り残されていると夫人が無意識的に感じているということではないだろうか。鏡をこのような形で利用することで、マクベス夫人が精神錯乱に陥り、自殺する場面が唐突感なく導入されたように思われる。

MS版では登場人物の紹介ページからすでに夫人の相反する側面が現れている。固有名詞を持たず「マクベス夫人」としか呼ばれない状況が、冒頭から強調されている。その一方で女性や母であることを否定し、男性たちのように活躍したいと夫人の願望は、彼らのように髪を結っているという外見で表わされる。冒頭での紹介のされ方を念頭におくと、その後の夫人の行動についても解釈が変わる。夫とともに登場する場面のほとんどは、激しく言い募るか険しい顔つきで指示するか時には平手打ちをするかのいずれかであるが、夫を動かすことでしか自分の野心はかなわないことを意識していたのではと思わせる。最終的に自殺を遂げるまでの場面は、良心の呵責故のみならず、夫を唆した自分の責任を自覚した故とも解釈できる。最後のページで夫と夫人の首が晒される場面は、他作品には見られない完全な創作であるが、死ぬことで最終的にマクベスと対等の者として扱われたという解釈のみならず、夫人がマクベスの妻として最期まで夫の付属品として扱われたという解釈も可能で、二つの相反する解釈は冒頭のページとの関連がある。そして、『マクベス』がマクベス夫人の物語でもあ

るという解釈を読者に感じさせる。

Markosia 版は上の二作品とは出版意図が大きく異なり、暴力描写を含む娯楽作品として扱われている。表紙や登場人物紹介を除くページ数は 52 ページで、複数の暴力行為が早いテンポで描かれ、時にロマン・ポランスキーの映画化作品を思い出させる場面もある¹²。おそらくはページ数の制限のために台詞の大幅な削除が行われている。が、それにとどまらず、台詞の削除やタイミングの変更、および台詞を別の話者に割り当てることにより、登場人物間の性格付けや人間関係が変更されている。それにより動作のみならず台詞によっても、マクベス夫人の夫に対する態度には母性的な要素があると読者に感じさせる。この要素が前半で示されているために、自殺の場面における、直接語られてはいない良心の呵責の大きさや、バンクォー暗殺を企むようになってからのマクベスの冷淡さが一層の説得力をもつといえるだろう。

仄めかされているとはいえ原作にない、しかもセンセーショナルな場面を加えることには慎重さが要求される。マクベス夫人が自殺する場面を加えているコミックスが数少ないのはそのためと思われる。が、ここで取り上げたいいずれの作品においても、この場面を、夫人が登場する場面と効果的に結び付け、マクベス夫妻の関係性の変化を異なる角度から説明することに貢献しているといえる。

註

1. まず「コミックス」と呼ばれるものについての定義を確認する。英語圏では日本のマンガにあたるものは graphic novel ないし comic book と呼ばれる。より詳細には graphic novel は登場人物の置かれた状況や心境を詳細に語るもの、comic book は主として娯楽的なものである。および新聞に連載される 3 コマや 4 コマのものが comic strip で、これらをまとめて comics と呼ぶ。文学作品が comic strip となる例は少ないため、本稿では前者二種類を「コミックス」として扱うこととする。以上、Fingeroth, pp. 3-7 より。
2. 以下の記述から、1980 年代初頭にはシェイクスピア作品のグラフィックコミックス化が始まっていたと思われる。“In the early 1980s, New York City-based Workman Publishing released the illustrated Shakespeare plays *Macbeth* and *King Lear*. [...] [L]ast month, Workman imprint Black Dog and Leventhal reissued *King Lear* and *Macbeth* in its Graphic Shakespeare series.” 以上、Miller.
3. 例えば、後述するマンガ・シェイクスピア (Manga Shakespeare) 版の『マクベス』。
4. 割愛や平易化が最も顕著に表れているのは後述するクラシカル・コミックス (Classical Comics) 社の作品であろう。『マクベス』を含むシェイクスピア作品については、一作品につき original text (ページ数に合わせた削除はあるが、可能な限り原文を用いるもの)、plain text (平易な表現への置き換えが目立つも

の)、quick text (話の流れが理解できる程度に大幅削除して平易にしたもの)と三種類のテキストを用意しており、様々な学力を持つ読者がいずれか一種類のテキストを選べるように配慮している。

5. 原作からの引用は、the Arden Shakespeare, third edition から行う。
6. 松岡、pp.124-26。
7. Mullan.
8. マンガ・シェイクスピアのウェブサイトには以下のような記述があり、日本のマンガの影響を受けていることを積極的にアピールしている。

Manga is a proven teaching tool:

It is widely used as an instruction medium in Japan[.]

In the UK, use of manga and other new media has been endorsed by The Scottish Office NATE, The Reading Agency, and the Quality and Curriculum Authority in meeting the needs of students studying English[.]

Manga uses 'sequential art' to tell stories and to stimulate ideas[.]

9. あるインタビューに以下のようなやり取りがある。この中で、制作陣の一人エマ・ヘイリーは、MS が現代活躍しているアーティストの力により、若年層にアピールするように編集されていると宣伝している。

Newsrama: What do you think sets Manga Shakespeare apart from the rest?

Emma Hailey (EH): It's all about the pacing and the storytelling that brings Shakespeare's words to life. We're using a genre that speaks to a hip audience who has less time for more traditional looking adaptations and more time for ones that have that not only have that cool factor, but are put together by artists who are more rooted in the 21st century. [...]

Newsrama: Why do you think classic literature translate well into graphic novels and/or manga?

EH: [...] Not all classic literature will translate well into graphic novels or manga, but we feel that the ones we have chosen will work well. Just in the same way that plays are reinvented in different modern contexts and forms (such as screen adaptations), graphic novels are another form of artistic expression. We are reinventing some excellent, timeless literature.

以上、Kean によるインタビューより。

10. なお、翻案者と作画担当者はいずれもフィンランド出身。
11. 原作でも “What’s to be done?” (III.ii.45) と尋ねる夫人に対し、“Be innocent of the knowledge, dearest chuck,” (III.ii.46) とマクベスは返答を避けている。
12. 例えば、ポランスキー作品では夢遊病の場面でマクベス夫人が全裸で現れる。

参考文献

- Fingerioth, Danny. *The Rough Guide to Graphic Novels*. London: Rough Guides Ltd, 2008.
- Kean, Benjamin Ong Pang. “Self Made Hero, Shakespeare and Manga.” Nov. 1 2007. <http://forum.newsrama.com/showthread.php?t=134954>. (現在閲覧不可)
- Miller, Jen A. “Shakespearean Drama Gets Graphic.” *Poets and Writers 50 and Forward*. https://www.pw.org/content/shakespearean_drama_gets_graphic. (2020 年 11 月 2 日閲覧)
- Mullan, John. “Something Wicked This Way Comes.” <http://www.theguardian.com/arts/graphic/0,,2259294,00.html> (2020 年 11 月 2 日閲覧)
- Shakespeare, William. *Macbeth*, the Arden Shakespeare, third edition. Ed. by Sandra Clark and Pamela Mason. London : Bloomsbury, 2015.
- _____. *Macbeth*. Adapted by Petri Hanninen. London: Markosia Enterprises Ltd, 2019.
- _____. *Macbeth, the Graphic Novel*. Adapted by John McDonald. London: Classical Comics Ltd, 2008.
- _____. *Macbeth*, Manga Shakespeare. Adapted by Richard Appignanesi. London : SelfMadeHero, 2008.
- _____. *Macbeth*. Dir. Roman Polansky. Perf. John Finch, Francesca Annis, Martin Shaw. Columbia Pictures, 1971.
- 松岡和子 『すべての季節のシェイクスピア』 筑摩書房 1993 年

